



富士山

信仰の対象と芸術の源泉

6月16日から27日まで、カンボジアの首都プノンペンで第37回ユネスコ世界遺産委員会が開催され、富士山が世界遺産に登録されました。富士山は、美しく荘厳な姿から、時代を超えてさまざまな信仰の対象となり、また優れた多くの芸術作品に取り上げられるなど、まさに日本文化の源となってきました。古くから現代まで人々にさまざまな思いをかき立ててきた富士山。世界遺産登録はゴールではなく、人類共通の財産として未来へ引き継いでいくための新たなスタートです。



世界遺産は人類共通の宝物

世界遺産は、世界遺産条約にもとづいてユネスコの世界遺産リストに記載されている物件のことです。かけがえのない人類共通の財産として、国際的に保護、保全し未来へのこしていく必要のある貴重な文化財や自然のことです。世界遺産は、「文化遺産」「自然遺産」「複合遺産」の3つに分類されています。富士山は、文化遺産として登録されました。

文化遺産／記念工作物や建造物群、遺跡など

自然遺産／地形や景観、生物の生息地など

複合遺産／文化遺産と自然遺産の両方に登録されたもの

世界遺産に登録されるためには、ユネスコ世界遺産委員会で、その価値（顕著な普遍的な価値）が認められること、将来にわたって守っていく仕組みが整っていることなどが求められます。

国内の物件では、1993年に「法隆寺地域の仏教建造物」「姫路城」「屋久島」「白神山地」の4件が初めて世界遺産に登録され、昨年まで文化遺産12件、自然遺産4件、計16件が登録されています。富士山は、国内で17件目の世界遺産となりました。

富士山の文化的価値

富士山は、標高3776mと日本一の高さを誇る独立峰で、荘厳な円すい形の雄姿をもつ成層火山です。富士山は、神仏の居所とみなされ、崇拜の対象として神聖視され、日本における様々な宗教・宗派を超えて信仰の対象とされてきました。

また、周辺から展望される富士山の雄大で美しい姿は、時代を超えて多くの人々に賞賛され、芸術的な創作活動に対する意欲をかきたててきました。特に江戸時代に浮世絵に描かれた富士山の図柄は、西洋美術のモチーフにも多用され、日本と日本文化を象徴するものとして海外にも定着しています。

富士山の構成資産

富士山そのもののほか、周辺の神社、登山道や湖沼など富士山の文化的価値を証明する貴重な文化財が、構成資産です。当市の関係では、須山口登山道と須山浅間神社が構成資産になっています。

世界遺産登録までの歩み

平成19年 1月	世界遺産暫定リスト（各国が作成した世界遺産リストに登録するための推薦物件候補の一覧表）に記載
平成19年 6月	富士山が世界遺産暫定リストに記載されたことを世界遺産委員会で報告
平成23年 7月	静岡県・山梨県が推薦書原案を国（文化庁）に提出
平成24年 1月	日本政府がユネスコ世界遺産センターに推薦書を提出
平成24年 8月～9月	ユネスコの諮問機関イコモス（国際記念物遺跡会議）による現地調査
平成25年 4月	イコモスの評価結果の勧告 条件付きで富士山の世界遺産リストへの記載が適当との勧告
平成25年 6月	第37回世界遺産委員会で審議、登録が決定。世界遺産リストに記載



▲構成資産の一つである須山浅間神社（国史跡）

須山口登山道

～室町時代には成立していた歴史ある登山道～

須山口登山道は、須山浅間神社を起点とし、山頂部に至った登山道です。古くは正治2(1200)年の「まつだい末代しょうこのためさん か そんたちあいかけのこと爲証しょうごう據三ヶ村立会書付事」に「東口珠山」の名前がみえます。また、京都聖護院の道興法親王の旅行記「かいこくごつ き廻国雑記」には、文明18(1486)年、須山口と推定される「すはま口」を訪れたことが書かれていて、室町時代には使用されていたことがわかります。

しかし、宝永4(1707)年の宝永の大噴火により登山道の中間部分が吹き飛ばされてしまいました。安永9(1780)年に完全復興し、富士山頂を目指す道者は、県内をはじめ、伊勢、房総半島、江戸と広く東西から集まりました。寛政12(1800)年の富士山の御縁年ごえんねんには、5,398人の登山者を集めました。

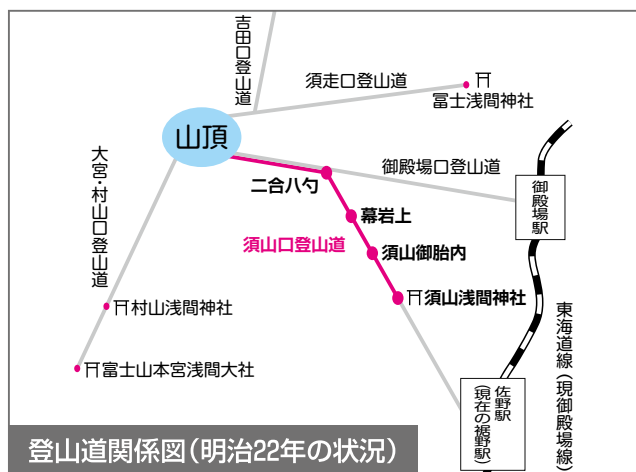
明治16(1883)年、須山口の二合八勺に合流する御殿場口が開設され、明治22(1889)年に東海道線（現在の御殿場線）が開通すると、現在の裾野駅からの須山口よりも距離が短い御殿場口が利用されるようになり、須山口の利用者は減少していきました。そして、明治45(1912)年に登山道の一部が旧陸軍演習場となり通行自体が困難となりました。

平成8(1996)年、須山口登山歩道保存会が発足し、翌年から平成11(1999)年にかけて、須山浅間神社から水ヶ塚公園を経て富士宮口六合目に至る須山口登山歩道

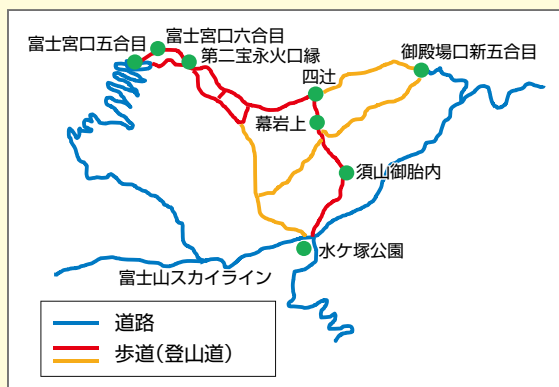


須山口登山道一合目（須山御胎内）

とかつての須山口を利用した須山口下山歩道が整備されました。かつての須山口の二合八勺（標高2050m）から山頂にいたる登山道（現 御殿場口登山道）と須山御胎内周辺から幕岩上までの遊歩道が、須山口登山道として構成資産（世界遺産としての登録資産）の範囲となっています。



登山道関係図 (明治22年の状況)



須山口登山道を歩いてみよう！

「富士山を歩く」というと、山頂を目指す富士登山を思い浮かべる方が多いかもしれません。富士山は山頂へのルート以外にも、遊歩道、登山道が整備されています。須山口登山道として世界遺産の登録範囲になっているのは、現在の御殿場口登山道のうち須山口登山道の二合八勺から山頂に至る部分と富士山自然休養林の遊歩道になっている幕岩上～須山御胎内周辺です。「山頂までは無理だけど、富士山を歩いてみ

たい」という方、富士山自然休養林の遊歩道を歩いてみませんか？

水ヶ塚公園から須山御胎内までは、片道40分程度です。富士宮口五合目から宝永火口縁を経由し須山御胎内を通して水ヶ塚公園に至るコースは下りが中心で所要時間5時間程です。宝永火口の迫力ある景色、富士山の森林、信仰登山の趣を今に伝える須山御胎内など魅力がいっぱいです。お出かけの際は、登山に適した服装と食料や雨具などを必ずお持ちください。

問合せ／商工観光課 ☎ 995-1825



直径1 km以上の宝永火口

須山浅間神社

～須山口登山道の起点～

須山浅間神社は、須山口登山道の起点となった神社です。古くから須山口登山道を通して山頂を目指した登山者が、みそぎを行い登山の安全などを祈願しました。

須山浅間神社は社伝によれば、日本武尊^{やまとたけるのみこと}が東征した際創建し、欽明天皇13(552)年に蘇我稲目^{そがのいなめ}が再興したとされています。覆殿^{おおいでん}の中にある現在の本殿は、江戸時代後期の文政6(1823)年に建立されたと伝えられています。また、拝殿手前右側の覆屋の中には古宮とよばれる小社が安置されていて、慶長16(1611)年に建

立されたものと考えられています。

社叢^{しゃそう}(※1)には、樹齢400～500年以上とされる20本程の杉の巨木があり、目通りの太さが周囲7m程のものもあります。これらの木は、神社の存在を証明するだいたい^{むなふだ}大永4(1524)年の棟札(※2)とともに、須山浅間神社の歴史を語り、厳肅な雰囲気^{げんしゆく}を漂わせています。



大正時代の須山浅間神社



覆屋の中にある古宮とよばれる小社

富士山の歴史を語る上で必要な神社や登山道が、史跡「富士山」として国の文化財(史跡)に指定されました。須山浅間神社は、信仰面での富士山の顕著な普遍的価値を証明する上で不可欠な資産であるため、境内地と社叢が平成23年2月7日、国の文化財(史跡)に指定され、構成資産の範囲となっています。

※1 神社を囲むようにして存在している森林

※2 棟札：神社などで、新築や修理の際、工事の由緒・年月日・建築者などを記し棟木に打ちつけた木の札

アクセス／●三島駅、裾野駅方面から須山行きバス、「須山」下車。徒歩10分

●十里木方面から御殿場駅行きバス、「津土井」下車。徒歩3分。

富士山須山口略絵図

(複写：富士山資料館所蔵)



年代は未詳ですが、宝永山が描かれているので、1780年以降のもので。中央に須山浅間神社や御師住宅が描かれ、一合目役場の須山御胎内を通して山頂まで登山道が通じているのがわかります。

富士山資料館特別展

おし
旧御師渡邊家の遺品

渡邊家は須山浅間神社に属する御師として、信者のための祈とうや富士山頂を目指す信者の宿泊や登山の世話をしていました。渡邊家から寄贈された江戸時代から明治にかけての御師にまつわる資料などを展示します。

と き／7月10日(水)～10月14日(月)

※(月)は休館日 ((月)が祝日の場合はその翌日が休館日)

ところ／富士山資料館

問合せ／富士山資料館

☎ 998-1325